対談 守破創

ニュース番組で、経済問題について分かりやすく解説する宮島香澄氏。男女雇用機会均等法施行後の第一世代の女性記者・女性管理職として、マスコミの世界で長く活躍してきた。働く女性の育成・学びに不可欠なものとは何か。育児と仕事の両立は難しいものなのか。同世代の中川順子審議委員と語り合う。

女性社員が活躍し続ける原動力は「やりがい」体験

日本銀行政策委員会 審議委員

中川順子

NAKAGAWA Junko

1965年奈良県生まれ。88年神戸大学文学部卒業後、野村證券（株）入社。2001年同社財務部フィナンシャル・プランニング課長、04年同社退社。08年野村ヘルスケア・サポート＆アドバイザリー（株）代表取締役社長、10年野村ホールディングス（株）マネージング・ディレクター（Co-Deputy CFO）、11年同社執行役 財務統括責任者、13年同社執行役員 グループ・インターナル・オーディット担当、17年野村アセットマネジメント（株）執行役専務兼チーフ・リスク・オフィサー（CRO）、19年同社ＣＥＯ兼代表取締役社長および野村ホールディングス（株）執行役 アセット・マネジメント部門長、21年野村アセットマネジメント（株）取締役会長。同年6月より日本銀行政策委員会審議委員。

日本テレビ放送網株式会社報道局 解説委員

宮島香澄

MIYAJIMA Kazumi

1965年長野県生まれ。84年東京大学入学。86年には東大の研究組織「新聞研究所」（現・東京大学大学院情報学環・学際情報学府）に入り、社会情報学などを学ぶ。88年同大学文学部卒業後、日本テレビ放送網（株）に入社。記者・番組ディレクターとして、スポーツ局でソウル夏季五輪やプロ野球のヤクルト・スワローズなどの取材・放送を担当。90年に報道局に異動し、厚生省担当記者として薬害エイズ事件を取材。96年からは経済担当となり、旧第一勧業銀行の総会屋利益供与事件や山一證券の自主廃業などを伝えた。2008年に報道局解説委員となり、日本テレビ系列「ズームイン!! SUPER」「news every.」「news zero」などで経済ニュースを中心に解説する。財務省「財政制度等審議会」や経済産業省「産業構造審議会」、厚生労働省「社会保障審議会」、官邸「人生100年時代構想会議」など政府審議会委員も多数歴任。

入社四年目に体感したマスコミの仕事の価値

中川　宮島さんと私は大学を卒業した年が同じですが、マスコミで長く活躍されている同世代の女性はとても少ないと思います。宮島さんが記者の仕事を志望されるようになったのは大学時代ですか。

宮島　大学三年生のとき、大学内の新聞研究所に入り、そこでマスコミ志望の先輩方とたくさん知り合いました。でも、自分もマスコミにぜひ入りたいとまではならなくて……。中川さんもご存じのように、当時の就職状況は、女子学生が長く働こうと思えば、厳しかったですよね。就活をしたのは男女雇用機会均等法施行の翌年でしたが、「女性社員は自宅通勤に限る」などという会社も少なくなかったですし、女性総合職の採用はわずかでした。私のような地方出身の女子学生は「就職先がないよ」と言われていたんです。

中川　東京の大学を卒業されても、ですか。

宮島　はい、それで、私はとにか

写真 野瀬勝一

く職を得なければと、業種を絞らずにOG訪問していました。自分がマスコミに向いているのではないかと思ったのは、就職活動を始めてからです。いろいろな会社の人の話を聞くことが、単純に楽しかった。マスコミの仕事は、いろいろな人の人生を、ちょっとだけ疑似体験できる感じがして面白そうだなと思ったんです。

中川　マスコミは今も男性社会の業界というイメージがありますが、入社して戸惑いはありませんでしたか。

宮島　最初の配属先はスポーツ局でした。私は中学・高校生活で、スポーツ（水泳）中心に頑張っていたので、私が配属されたことは自然だったのかもしれませんが、私自身はびっくりしました。スポーツ局で二人目の女性記者だったんです。一つ上の女性記者は結婚で辞めてしまいましたし、男性ばかりの職場の中で、今なら考えられないような働き方をしていました。皆は詳しいのに私はよく知らないスポーツの取材が多くて、振り返ると、よく会社を辞めなかったなとも思います。入社後、この最初の約二年間が私のキャリアにおける最大の危機でした。

　続けることができたのは、自分の仕事には価値があるんだなと、そう思える経験をしたからです。三年目、報道局に異動した後、スポーツ局での取材を基に、アラスカの未踏峰に挑戦する女子高生たちが主人公のドキュメンタリー番組を思い切って提案し、企画が通ったんです。私も冬の富士山で登山訓練を積み、翌年一カ月の現地取材を経て番組にまとめました。

　放送後の反響は、私の予想以上でした。こんなに多くの人たちに感動してもらえる。その番組を見て山岳部に入ったという女子高生もいて。この仕事、そう簡単には辞められないなと思ったんです。

中川　仕事の楽しさ、続けていくモチベーションを早い段階で得ることができたのは大きいですね。

宮島　その後、報道局で当時の厚生省の担当になり、薬害エイズの問題を取材した経験も大きかったと思います。私たちが真剣に飛び込み報道したことが、被害に遭われた方々を巡る環境や裁判にまで影響したように感じました。被害者の方々も山岳部の方々も、今もお付き合いがあります。キャリアの初期に、一生連絡を取り合える方々とお会いできて、私のキャリアの重要な局面を共有してもらえたのです。

伝える工夫が求められる経済ニュースと金融教育

中川　私が宮島さんと知り合った頃は、年金・財政と経済がご専門の印象でした。

宮島　三〇代になり、経済部への異動を希望しました。その一つの理由は子どもを持つことを考えたからです。記者はどこの担当でも長時間労働ですけれども、警視庁や官邸の担当になると二十四時間いつでも動けるようにしなくてはいけません。経済の担当も取材が大変なところはもちろんありますが、基本的には多くのことが平日に動きますし、政策を巡るニュースは時期が見通せるんです。また、民放テレビの経済部は小所帯ですが、そのぶん、記者は一人で幅広い範囲の仕事ができます。経済を軸に記者としての専門性を身に付けていきながら、子どもを育てることも何とかできるのではないかと考えたわけです。

中川　でも、経済部に移られた頃は、何十年に一度という出来事が相次いだのではないですか。

宮島　経済部で、ゆっくりやろうとは思っていませんでしたが、異動したのが一九九六年の末で、翌年の九七年にはまず金融不祥事、海外でアジア通貨危機、さらに金融危機で十一月には山一證券が自主廃業しました。当時、私は妊婦だったのですが、山一證券の社長が号泣し謝罪した、あの会見の場にもいました。証券会社だけでなく、金融市場や日銀、さらには民間の銀行や企業も私の担当でしたので、日々忙しく夢中でしたね。だけど、金融危機を巡る事象について横串を通すように見ることができた。経済のいろいろな問題を、角度を変えながら捉えることができるように感じました。

　ただ、財政金融分野をはじめ、経済に関するニュースは映像にな

りにくいものが多いです。視聴者にとって大事なことなのに、テレビとは折り合いが良くないのが経済ニュースなんです。だから、分かりやすく伝わるように工夫を凝らしています。予算案の内容をドラマ化して説明したり、国際会議で購買力平価（注）を説明するためにハンバーガーを大急ぎで買いに行って手に持ってリポートしたり。最初に難しいなと感じられると、その先を見てもらえませんから。

中川　昨年四月から高校の金融教育が拡充されましたが、今のお話と通じるところがありますね。日本では金融教育が行き届かないとか、学んだことのない人の比率が凄く高いなどと指摘されますよね。けれども、私は、どちらかというと「金融」や「お金」にまつわるコンテンツが多すぎて、受け取る側が大変になっているのではないかと思うんです。

パソコンやスマートフォンさえあればオンラインでいろいろ学ぶことができるようになりました。SNSの利用も普及したので情報のやりとりも簡単です。だけど、それがゆえに本質をつかむことが難しくなっています。あふれ返るコンテンツを整理整頓できる人はそんなにいないでしょうから。

宮島　信用度もばらばら、発信者の意図もばらばらな中から取捨選択しなくてはいけないですよね。「お金」との向き合い方について言えば、そもそも日本は諸外国とは異なるスタンダードが根強く残っているのではないでしょうか。例えば、日本の子どもたちはお年玉をもらうと郵便局などで口座をつくって貯金する。親が当然のように勧めていて、そんな環境下では「お金を社会のために生かそう」というような感覚は育ちにくいと思うんです。

中川　米国の金融教育の本には、子ども向けの絵本もあります。研究者がきちんと監修している絵本など、これいいな、と思うものがあるんですよ。「お金は自分の欲しいものだけに使うのではなく、社会に役立つことにも使おう」という考え方はすてきだな、と思わせてくれるんです。今後、日本の金融教育のコンテンツを整理したり充実させたりするために、マスコミの皆さんに知恵を出してもらえたらうれしいですね。

子育てと仕事の両立は自分なりにやれば良い

中川　宮島さんの二人の息子さんは社会人と大学生になられたと伺いました。若い世代には「働きながら子育てをきちんとできるか心配」という声が少なくありませんが、宮島さんはご経験者としてどう思われますか。

宮島　今の若い人たちは「子育ては凄く大変だ」と思いすぎているのかもしれません。私は、子どもには「勝手に育つ力」があると思うんですね。子どもについて私が迷っていた時期に親から「子どもは木の根元に産んでおいても育つよ（子どもは自分の力で育つものよ）」と言われました。もちろん、これは半分冗談で言われたことですが、働きながら子育てをするのも「どうにかなるんじゃないの」ということかと思って……。半信半疑でしたが、そういう気持ちで子育てをやっていたら、本当に何とかなった、という感じです。

息子二人が小さい頃は、私が見てあげられる時間が少なかったからか、先生に「忘れ物が多いですね」などの、注意をよくされました。私も翌日までに用意しないといけないものを買いにいけなかったり、水着に名前を刺繍（ししゅう）しないといけないのにうまくできなかったり、ダメな母親のポジションにいたんです。まあ仕方がないなと思っていたんですけれども、驚いたのは、息子たちが中高生になった頃からは「息子さんは凄く自立していますね」と褒めてもらえるようになったことです。確かに二人とも、部活でも受験でも何でも「こうしたい」と自分自身ではっきり決めるタイプに育っていました。それは、私が口を出す余裕があまりなかったからじゃないかと、良いように解釈しているんです。

（注）為替レートは自国通貨と外国通貨の購買力の比率によって決定されるという考え方。例えば、あるモノが日本で一〇〇円、米国で一ドルである場合、購買力平価による為替レートは一ドル一〇〇円となる。

中川　子育ての形は一つじゃないから、自分なりでいいし、完璧を目指さなくてもいいということですね。

宮島　今の若い世代には、予定の立たないことに対して過度な不安を感じる人も多いような気がします。子育てをするために制度の整っている会社に入らないといけないとか、女子学生たちは考えすぎていると思うんです。

女性活躍の推進に関する検討会で、日本の大卒女性が仕事を辞める原因などについて調査した委員がいらっしゃいました。その調査結果のお話が強く印象に残っています。大卒女性に仕事を辞めた理由を聞くと「育児・家事との両立が大変だから」と、まず回答する。ところが、さらに掘り下げて聞いてみると、「仕事にやりがいがない」という本音や不満が浮かび上がってくるというのです。

女性は出産や子育てがあるから、大きな仕事のチャンスが男性に優先的に与えられるという傾向がある会社は多いと思います。ただ、会社として女性に長く活躍してもらいたいなら、キャリアのできるだけ早い段階で、きついけれども大事な仕事を任せてみたらどうでしょう。そこで女性が仕事のやりがいを一度体感できると、その後、いろいろなハードルが出てきたとしても何とか乗り越えようとすると思います。私はそうでした。会社は子育ての制度を整えたりする以上に、やりがいのほうを大事に考えてほしいなと。

中川さんのお話も少しお聞きして良いでしょうか。私は同じ会社に勤め続けることを選択して何とかやってきましたけれども、中川さんは会社をいったん辞め、その後復帰されてから改めてステップアップされました。

中川　一度会社を辞めたのは家族の都合（夫の海外転勤）があったからです。ただ、また仕事をしたいと思っていましたから、不安でしたね。再雇用制度みたいなものがあれば心強かったかもしれませんが、当時は何もなかったんです。

（退社から四年後に）まずは契約社員の形ではありましたけれども、元の会社のグループ会社に入ることができました。振り返ると、ラッキーだったと思います。キャリアがいったん切れたところからリスタートしましたから「仕事があればラッキー」というくらいの気持ちでした。だから、その後どんな仕事が来ても、うれしさしかないんですよね。仕事がある、機会がある、そのやりがいの方がしんどさに勝つんです。その経験は自分の成長にとって本当にラッキーだったと思います。

宮島　キャリアの途中で、そのときはプラスに転ぶかマイナスに転ぶか分からないけれども、意外とやってみるとプラスになるということがあると思いますね。私は当初、子どもがいることは記者の仕事を続ける上ではマイナス以外の何物でもないと考えていました。でも、社外の仕事として政府の審議会の委員を務めるようになると、そこで発言するにあたって子育ての経験もプラスになったんです。子どもたちの将来、次の世代を念頭に置きながら経済政策について考える。それが、自分の記者としての核にもなりました。ですから、若い世代の皆さんには「何でも無駄にはならないよ」と伝えたいですね。そして、大きな仕事にチャレンジして、自分の仕事を好きになってもらいたいです。

中川　本日はありがとうございました。